



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和八年九月 第四百四十四号

光熱費などの通帳からの引き落としはともかく、現金払いですつと暮らしてきたのですが、最近は一スパーで買い物しても、車で出かけて駐車しようと思っても、そのたびにスマホが必要になったりして困っています。日常の小さなことですが、気分がうつとうしくなります。「時代についていけなくなったただけのことよ」と言われればそれまでですが。

最近の天気の変遷について

直接の被害には幸いまだ遭っていないのですが、このところの異常気象には不安がつのります。北海道から九州沖縄まで、大雨どころかゲリラ豪雨で、いたる所で河川が決壊し、床まで浸水して大変なことになっています。下水なども流れ込んで悪臭を発生しているところもあるでしょうし、感染の危険すらあります。

そもそも止まらない地球温暖化のせいで、赤道あたりでは太平洋の水温が三十度を超えるところもあり、それが水蒸気となって大量の水分を含んだ雲が日本列島にどつと流れ込んでいます。ゲリラ豪雨にならないわけがない。このサイクルはもう後戻りできないという専門家もいます。そう言えばここ十年近く、毎年のように洪水被害にあっています。この大量の水蒸気は、冬になったらこんどは大雪になって日本を襲うのでしょうか。

ほんの一月前、四十度を超える猛暑が各地に発生し、外出すら控える時期がありました。気候のせいで外出を控えるなんてSF映画じゃあるまいし、と思うのですが、そのことが現実となった今、いったいどうすればいいのでしょうか。

人間は便利さを求めてずっと進歩してきたはずなのに、ずいぶん住みづらい世の中になったものです。自然か何かのしつぺ返しでしょうか。人工知能(AI)はその便利さだけに拍車をかけています。ですから、あんなものは大変便利ではあるのですが、最終的には信頼できません。

親鸞聖人の言葉(二)

他力と自力

「他力本願」という言葉が世間では流布しておりますが、これは自分で努力しないで人任せにする、というほどの意味で使われております。しかし、本来はまったく別の意味です。他力というのは、現代の仏教の根本の教えであり、「他力」の「他」は他人ではなく仏さまのことです。私たちは仏さまの力で生きられている、というのが本来の意味

です。

私たちは、通常ほぼ九十九パーセント、自分の力で生きていて、残り一パーセントぐらいが偶然とか幸運不運などごまかして生きていると思います。しかし実はその逆で、九十九パーセントが仏さまの力によって生かされているのです。

私が今、この時代にこうして僧侶として悩みながら生きているのは、自分で思うように生きてきたのではなく、そのように仏さまの力によってこのような人生を送ることになってしまったのであり、右往左往しながら今を生きているのです。自分の力なんてものは一パーセントもない。もちろんここで言っている仏様というのは、私たちがイメージする仏像ではなく、人間の眼には見えない働きそのものです。たとえば「風」と言い換えてもいいかもしれない。

問題なのは、日々の出来事や自らの人生に対して、必ず「善し悪し」をつける癖が人間にはあることです。「なぜこんなに人の世話ばかりして日々を送らなきゃいけないの」とか「なぜこんな病気になるってしまったのだ」とか、自分の思い通りにならないことを悪と思い、思い通りになった出来事を善と違って過ごしています。そして「自力」で何とかしなきゃ、なんとかしなきゃ、と思いながら過ごしています。ですからたぶん死ぬまで苦労は絶えません。

親鸞聖人のご著書を読んでいますと、そうした「善悪」をつけながら生きている自分という者をずっと見つめておられます。人に親切にすれば何か良いことがあるのではないかとか、「念仏を称えなさい」と言われれば、称えたらなんか良い人生が送れるのではないかとか、そういう自力の思いから逃れられない自分という者をずっと見続けておられます。その「他力」と「自力」のせめぎあいの中で人生を送られた方だったと思います。

良寛さんの「災難にあう時にはあうがよろしく候、死ぬるときには死ぬるがよろしく候」という言葉があらためて深く響いてきます。